

キリストの力がわたしの内に宿るように

コリントの信徒への手紙Ⅱ 12：2－10



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年7月7日

聖霊降臨後第7主日

上野聖ヨハネ教会にて

今日は、使徒書、パウロの「コリントの信徒への手紙Ⅱ」第12章を読んでみましょう。

初めにいくらかこの手紙の背景をお話しします。コリントはギリシアの大都市です。パウロはここに約1年半滞在してコリント教会の基礎を築いた後、そこを去って別の場所に移りました。ところがその後にコリント教会に入ってきた有力者たちの影響で、福音の理解が歪められ、しかも教会の中に分裂が生じ、党派争いが激しくなりました。これを心配したパウロは最初の手紙を書き送り、さらに直接コリントをもう一度訪問して、教会の混乱を静めその歪みを正そうとしたのです。ところがかえってコリント教会のおもだった人たちがパウロを非難するようになり、関係は険悪になってしまいました。

それでパウロは深い悲しみと怒りを抱きつつも、コリントの人々を切に愛する思いで、涙ながらに手紙を書きました。10章から13章がそれにあたるとされています（実は、この「コリントの信徒への手紙Ⅱ」はいくつかの手紙が一つにまとめられたものとされます）。今日の箇所は、その「涙の手紙」の一部です。

ここでパウロは、何とかしてコリントの人々に自分の気持ちを通じさせたいと、普通ならば言わないようなことまで書いています。たとえばこうです。

「あなたがたを愛すれば愛するほど、わたしの方はますます

愛されなくなるのでしょうか。」コリントⅡ 12:15

コリント教会の人々というのは、つい2～3年前まで、自分が苦勞して心をこめて、その信仰を産み育てた、大切な大切な存在なのです。ですから今の葛藤の状態はとても辛い。

パウロはこの手紙の中で、自分の苦勞のことも書きました。

「ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度。鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。……しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」11:24-27

耐えがたい苦しみと命の危険に何度もさらされる中で、彼はあるとき、不思議な経験をしました。今日の使徒書の冒頭です。他のだれかのことのような言い方をしていますが、パウロ自身のことです。

「わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っていますが、その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。わたしはそのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。彼は樂園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。」12:2-4

彼は樂園、天国の経験をした。こういう信仰体験をしたことで自分を誇ろうと思えば誇れるかもしれない。しかしパウロは決してそんなことはしない。「自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません」(12:5)と言います。

ところで人間的に言えば、彼には誇ろうと思えば誇れるものがありました。若いときは有名な律法学者ガマリエルのもとで学んで深い聖書の知識を身に着け、復活のキリストとの出会いによって劇的な回心を遂げ、人並み外れた信仰的熱心を持って働き、類たぐいなき大伝道者にして教会設立者と、自他ともに認められている。そのために背負った巨大な労苦。不思議な信仰的神秘的経験——これらがパウロの人間的誇りとなり、信仰的誇りとなり得たのです。人から尊敬されたり、あるいは逆に非難されたりしたら、自負の度合いはいつそう強まるでしょう。

しかしここに重大な危険が潜んでいます。密ひそかに思い上がって、そのぶん信仰の純粹さを失い、神の栄光を曇らせる危険です。「信仰的傲慢」と言ったらいいでしょうか。無意識のうちに、神の傍らに「立派な自分」を置こうとする危険。神によってしか砕かれないものです。

このようなパウロを、時々激痛が襲いました。こう言います。
「それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がら

ないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。」12:7

鋭いトゲが自分の身と心を刺し貫くような、耐えがたい苦しみに襲われるのです。こうなるとパウロはもう必死で神に助けを祈って、自分の密かな誇り、高ぶりを投げ捨てて神に^{ざんげ}懺悔するほかはありません。自分は思い上がっていた。自分が弱く愚かな罪人であること、イエス・キリストの救いなしには滅ぶしかないことを思い知るのです。

あまりにも耐えがたい苦痛。「わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使い」と表現するほどです。この肉体の「とげ」を取り去ってほしい。神さまのために働くことの妨げにもなるではありませんか。「この使いについて、離れ去らせてくださるように、わたしは三度主に願いました」(12:8)。「三度」というのは、祈りの限界まで、ということでしょう。けれどもその願いは聞かれませんでした。主の答えはこうでした。

「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。」12:9

パウロは辛^{つら}かったです。受け入れるのに時間がかかったかもしれません。けれどもこの主の声によって、彼はあらためてイエス・キリストの苦難から来る恵みと力とを知らされたの

です。自分の苦痛をとおしてキリストの苦難を具体的に感じる。自分の弱さ、自分の無力。その中にこそ力が働く。イエス・キリストの十字架の愛の力が、自分の弱さの中に、弱さをとおして働き、目的を達成させる。

これはパウロにとって、最初の回心からずいぶん後の、第二の回心だったかもしれません。そこで彼はこう言います。

「だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」 12:9-10

自分の経歴、業績、強さではなく、自分の弱さが誇りとなった。そこにこそ、キリストの力が働いてくださるからです。

この手紙を受け取ったコリントの人々は心を打たれました。パウロが自分の思い上がりをあの「とげ」によって砕かれたように、コリントの人々も、自分たちの思い上がりを砕かれて、和解の道が開けたのです。

今日聞いたパウロの経験と言葉は、わたしたちの人生の可能性を開いてくれます。わたしたちも自分の弱さを多くの場合否定的に思います。けれどもそこには大切な可能性がある。わたしたちは自分の弱さを知ることとおして苦難のキリストを知

る。と同時に、自分の弱さを知ったわたしの内にキリストの愛と力が宿ってくださる。わたしの弱さをとおしてキリストの願いが実現して行くのです。

祈ります。

主イエス・キリストよ、あなたの力がわたしたちのうちに宿りますように。わたしたちの弱さをとおしてあなたの力が働いてくださいますように。わたしたちのために苦難を忍ばれた主の名をほめたたえます。アーメン